大学機関別認証評価実施大綱（案）及び大学評価基準（案）に対する各関係団体等からの意見について

平成17年5月に大学機関別認証評価委員会においてお取りまとめいただいた、「大学機関別認証評価実施大綱（案）」及び「大学評価基準（案）」について、今後さらなる検討を行う上での参考にするため、83の関係団体等へ意見照会を行い、6関係団体等（下線部を引いた4団体及び国立大学教育研究評価委員会委員・機構運営委員会委員）から寄せられた意見を整理したものです。

（照会先：83の関係団体等）

○大学関係団体等

- ・大学関係団体 国立大学協会 公立大学協会 全国公立大学設置団体協議会
日本私立大学団体連合会 日本高等教育評価機構
大学基準協会 国立大学附置研究所・センター長会議
大学共同利用機関協議会 日本技術者教育認定機構
私立大学通信教育協会
- ・経済団体 日本経済団体連合会 日本商工会議所 経済同友会
全国中小企業団体中央会

○大学機関別認証評価委員会委員等

大学機関別認証評価委員会委員
国立大学教育研究評価委員会委員 委員1名
大学評価・学位授与機構評議員
大学評価・学位授与機構運営委員会委員 委員1名

大学機関別認証評価実施大綱（案）に対する意見

【選択的評価基準の位置付けに関する意見】

選択的評価基準の一つである「研究活動の状況」の基準、趣旨、基本的な観点が新たに設定されるに至った。機構の大学評価基準では、教育活動を中心とした大学の総合的な状況の評価を実施するとの基本的な方針から、「研究活動」については大学評価基準（基準3及び5）において、教育活動と関連する側面（教育のための研究活動という観点）から評価を行うとされている。

たしかに、文部科学大臣が評価機関を認証する際の基準（認証基準）では、研究活動に関する単独の評価事項を求めているが、第一に、機構の当該選択的評価基準の趣旨において、「大学は、現在の研究活動や研究成果の状況及び社会・経済・文化の領域への効果についての的確に把握し、研究活動の改善や向上を図り、それらを社会に対して広く示していくことを求められている」旨を自ら提示していること、第二に、過日公表された中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」において提言されている、高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化が進んだとしても、大学院研究科を設置する大学等においては、当該大学等の研究活動に対する自己点検・評価を通じた研究レベルや効果等の検証とその公開が、納税者や学費負担者等に対するアカウンタビリティの一環として不可欠であること、などから、少なくとも大学院研究科を設置している大学等については、研究者養成大学院、高度専門職業人の輩出のための大学院または専門職大学院、の各々に求められる研究活動の状況に対する自己点検・評価と、その結果についての認証評価を通じた客観性・妥当性の担保が肝要であると考えられる。

この「研究活動の状況」についての基準を、一律に選択的評価基準とすることの説明を明確にし、部分必修的な基準とすることの可能性等について検討されることを望むものである。（大学基準協会）

教育活動に対する評価について特に問題はありません。

ただし、教育研究水準の維持及び向上を目的とした評価をすると謳っているが、評価の基本的な方針では、「(2) 教育活動を中心とした評価」で教育活動についての評価が強調されており、「研究活動の状況も教育面から評価する」としています。このことは大学における研究活動の意義を重視していない評価方針ではないかと強く懸念されます。（国立大学附置研究所・センター長会議）

大学にあつては、学校教育法において、「深く専門の学芸を教授研究し」という文言がその設置目的に掲げられています。従つて、教育活動の評価とともに研究活動の評価も重要であろうと考えます。その点からすると、研究活動が「選択的評価基準」として配置されており、「研究活動評価を受けるか否かは」大学の裁量によって「選択」できることになっています。このことについては、必ずしも理解できるものではありません。「選択的評価基準」ではなく「評価基準」に入れられるべきではないでしょうか。

評価基準の「はじめに」において「教育活動を中心とした総合的な状況の評価する」と述べられていますが、そうであれば、「研究活動の評価」は行わなくても良いことになるのでしょうか。(機構運営委員会委員)

既存の評価基準に加えて、選択的評価基準を加えることは、大学の独自性を積極的に評価する上で有効と考えられる。ただし、今回示されている基準は、いわゆる研究大学か教育大学としての特化した機能の評価基準によって分類しようとするような誤解を与えるのではないか。また、認証評価が実施されて間もない段階で、このような基準を導入することの必要性を検討すべきではないか。(国立大学協会)

今回提示の案では、「選択的評価基準」を選択した上で認証評価を受ける場合とそうでない場合とで、評価の結果やその効力等において、どのような差異が生ずるのか、という点に係る説明が必ずしも十分になされていない観が見受けられる。

仮に、「研究重視」をミッションとして掲げる大学の場合、選択的評価基準であるとはいえ、当該大学の「自主的判断」の結果として「選択的評価基準 A 研究活動の状況」の評価を受けることが、事実上、強制されることとなるのか。そうして、そのミッションに照らして、当該大学の研究活動の質や水準が厳格に評価され、果たして標榜どおりの「研究大学」か否かの判定が下されるということになるのか。

もし、そうであれば、選択的評価基準という文言にかかわらず、それぞれの大学の掲げる理念・目的のいかんによっては、それはオプションの余地のない、言わば義務的評価基準として作用し、その部分に係る評価結果が当該大学の今後の活動に重大な影響を及ぼすことになるものと思われる。(国立大学協会)

【Ⅱ 評価の基本的な方針】

(2) 教育活動を中心とした評価につき、「・・・評価の国際的動向等を勘案し・・・」とは、独立行政法人大学評価・学位授与機構が海外の大学・公的研究機関等から情報収集を行い、それらの動向把握を行い、その上で国内大学の評価を行われるという事でしょうか？国際競争力を問われる昨今、是非相対比較を行い、予算や人員の重点化を行う方策も必要かと考えます。(国立大学教育研究評価委員会委員)

今後は、大学における研究活動を、教育活動の一部として捉えるのではなく、学術・文化および産業を発展させる研究そのものとして重視・評価する方針を明確にした上で、各研究機関の研究内容に関してしっかりしたピアレビューを実施し、これを評価と資源配分に反映するようにはしていただきたい。(国立大学附置研究所・センター長会議)

【V 評価の実施方法】

「(1) 評価プロセスの概要」(実施大綱 p. 3-4)の文中には、「11の基準」について記述された文中に「選択的評価基準」についての記述が混在しているため、わかりにくい。

「選択的評価基準」を別項目で示すなど文章の整理を検討いただきたい。

(国立大学協会)

「①大学における自己評価」(実施大綱 p. 3)の文中には、「選択的評価基準」に関する実施方法が記入されていないため、11の基準と同じ実施方法であることが想定される。一方、①を受けて行われる「②機構における評価」(実施大綱 p. 3-4)には、「11の基準とは異なり、各大学が有する目的の達成状況等について評価する」ことが記入されており、「大学における自己評価」と「機構における評価」の実施方法が不連続な印象を受ける。(国立大学協会)

「……11の基準とは異なり、基準を満たしているかどうかの判断ではなく、その基準に関わる各大学が有する目的の達成状況等について、評価することとしています。」とあるが、「基準を満たしている」と「目的の達成状況」との区別が曖昧である。例えば、「……11の基準とは異なり、各大学が自主的に設定した目的からみて、提示されている観点に関わる達成状況がいかなるものであるかを、評価することが求められています。」などとしてはどうか。(国立大学協会)

「選択的評価基準」は「11の基準とは異なり、基準を満たしているかどうかの判断ではなく、その基準に関わる各大学が有する目的の達成状況等について評価すること」(実施大綱 p. 4, 大学評価基準 p. i 及び p. 26)とされているが、このことが評価の際に「基本的な観点」とどのように対応しているかが不明瞭であるので、文章を整理し明示するようご検討いただきたい。例えば、「(1) 評価プロセスの概要」(実施大綱 p. 3-4)の文中に、「選択的評価基準」の評価を行う際の「基本的な観点」の扱いについて明示することが必要と考えられる。(国立大学協会)

【VI 評価のスケジュール】

「評価のスケジュール」(P.5) に関して、機構による評価結果の通知後、大学からの文書による意見の申立てだけでなく、双方が直接意見交換する機会を制度として設けていただきたい。(国立大学協会)

【X 評価の時期】

平成 18 年度受審で準備しているが、選択評価の同時受審の準備が間に合わないことも考えられることから、「選択的評価 A, B を本体の基準 1 から 11 までの審査とは別に分離して受けられる」措置も検討していただきたい。(国立大学協会)

【XⅢ 大学評価基準等の変更手続き】

大学機関別認証評価実施大綱案「XⅢ 大学評価基準等の変更手続き」(7 頁) 中、「なお、選択的評価基準については、「研究活動の状況」と「正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況」の 2 つを設けていますが、評価の経験や関係者等の意見を踏まえ、これ以外の選択的評価基準を設けることなども考えられます。」と記述されているが、今後、新たな選択的評価を設けられる予定は具体的にあるのかお伺いしたい。

(国立大学協会)

大学評価基準（機関別認証評価）（案）に対する意見

【基準5 教育内容及び方法】

（大学院課程）

大学評価基準案「基準5. 教育内容及び方法」（11頁）中、基本的な観点（大学院課程）大学院課程においても産学連携が求められているように思われる。その中でも、大学院課程教育の中で院生の出口確保にもつながる、インターンシップあるいは大学院指導教員と企業研究所・研究室との人的交流等、産学連携の内容を問う項目を設置した方が良いと思われる。（国立大学協会）

【選択的評価基準について】

大学評価基準案「選択的評価基準について」（26頁下から6行目）中、「この選択的評価基準は、これらの基準に関わる活動等について、大学の目的に照らして大学自らが重要と判断する場合、大学の希望に基づいて評価を実施するもの。」と記述されており、どちらを選択するかによっては、社会から教育系の大学あるいは研究系の大学との選別を受けることが考えられる。地域に根ざした大学を目指す場合には、その性格上、地域の全方位的な知的戦力拠点としての機能が求められるので、この点の評価項目が必要である。その中に小項目として、「教育」、「研究」、「社会貢献」が評価されねばならないと考える。（国立大学協会）

【選択的評価基準A「研究活動の状況」】

（全般に対する意見）

選択的評価基準においては、11の基準とは異なり、基準を満たしているかどうかの判断ではなく、その基準に関わる各大学が有する目的の達成状況等について評価することとされている。

一方、「選択的評価基準A 研究活動の状況」の2は「大学の目的に照らして、研究活動が適切に行われており、研究の成果があがっていること」であり、その基本的な観点は、①研究が活発におこなわれているか ②研究の質が確保されているか ③社会・経済・文化の発展に資する研究が行われているか となっている。

各大学で行われている多岐にわたる研究活動に対して、この基準で具体的にどのような評価がなされるか、また、研究水準評価を研究活動における達成度評価の一部と捉えていると考えられるが、「研究水準の向上」を目的としている大学にあっては、試行の評価で行われた分野別研究評価の「研究水準評価」と同様の評価が行われるのか不明確である。さらに、このような研究活動・基盤を評価する機構側の体制が不明であるが、多数の専門委員の委嘱等大学に過度の負担がかからないよう配慮願いたい。

（国立大学協会）

「選択的評価基準A」についてであるが、「大学の目的」に照らして評価することになっているのが疑問である。現実的に、「大学の目的」に照らすことで、評価の尺度や方法等に差異が生じ、判断材料に欠けるのではないか。

特に、A-2については、「研究の成果」の評価が「大学の目的」に照らして可能であるかどうかは明確に判断できないのではないか。科研費のようなプロジェクト財源で行う評価は、研究の目的からの評価が可能であるが、大学のように多様な分野を持ち、基礎・応用・開発研究を行う組織において、「大学の目的」によって評価にバイアスをかけることが可能であるのかが不明である。(国立大学協会)

今般の改訂案には、大学評価学位授与機構の「試行的評価」における「分野別研究評価」の貴重な経験が十分に活かされておらず、研究活動の独創性、基礎研究への貢献、先駆性、有用性など、研究内容や水準を評価する方法が見えていない。この点の再考を求めたい。(公立大学協会)

(基準)

基本的な観点A-1-①は、選択的評価基準A-1と同じ内容であるため、基本的観点A-1-②及びA-1-③の位置付けが曖昧になっている。(国立大学協会)

選択的評価基準A-1、A-2の両項目について、何を基準として「適切」かどうかの判断を行えばよいのかがわかりにくい。例えば、基準2-1に倣い「研究の実施体制及び支援・推進体制が、大学の目的に照らして適切に整備され、機能していること。」のように文章を整理するとより理解しやすい。(国立大学協会)

提案された評価基準A-1、A-2は、いずれも「研究体制及び研究支援・推進体制」といった制度的・財政的制約を伴う指標や、「競争的研究資金の応募・獲得状況、外部評価や研究プロジェクト等の評価、受賞状況」など外的指標のみに重きが置かれている。したがって、適用可能な大学は概ね大規模総合大学に限られる。これは、公立大学の多様性を考えると適切な評価基準とは言えない。(公立大学協会)

「研究の実施体制及び支援・推進体制が適切に整備され、機能していること」が、基準となっているが、小規模大学では人数の制約上、十分な支援・推進体制を構築することは困難であり、一律に支援・推進体制を評価基準とすることは評価基準として適切でないと考える。(国立大学協会)

『研究成果の発信及び社会還元』に関する項目として、次のように別項目を立てた方が良いのではないか。

A-3 大学の目的に照らして、研究成果の発信が適切に行われ、社会に還元されていること。

理由： 国立大学法人評価委員会による中期目標の法人評価や他の認証評価機関の評価基準等において、『研究成果の社会への還元』が評価の対象とされており、評価のうえで重要な観点と考えられるため。(国立大学協会)

(趣旨)

大学の特色や個性を評価するために選択的評価基準を加えることはよいことであると考え、A「研究活動の状況」における「研究活動」を「教育活動と関連する研究活動」と「教育活動と関連する側面のみからでは十分把握することが難しい研究活動」とするのであれば、B「正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況」と同列に併記されていることには疑問を感じる。(国立大学協会)

「選択的評価基準A 研究活動の状況」の趣旨の文章中の4段落目は「この選択的評価基準は、このような大学の研究活動に関する全般的状況…」というように記載されているが、「このような大学の研究活動」には、「教育活動と関連する側面のみからでは十分把握することが難しい研究活動」のみが含まれ、「教育活動と関連する側面」は省かれているような印象があるので、文言について再検討してはどうか。(国立大学協会)

(基本的な観点)

基本的な観点A-1-①は、選択的評価基準A-1の文言から「大学の目的に照らして」を抜いたものになっているため、より広い意味に受け取られ、基準-観点の関係に矛盾している。(国立大学協会)

A-1-① 研究の実施体制及び支援・推進体制が適切に整備され、機能しているか。

A-1-② 研究活動に関する施策が適切に定められ、実施されているか。

とあるが、「実施体制」と「研究活動に関する施策」の区別がつきにくく、A-1-①とA-1-②の区別が曖昧である。例えば、

A-1-① 研究の実施組織が適切に整備され、研究の支援・推進体制が機能しているか。

A-1-② 研究環境、研究条件、研究方針などに関する施策が適切に定められ、実施されているか。

などとしてはどうか。(国立大学協会)

基本的な観点A-1-②の「研究活動に対する施策」が研究推進のための施策を意味するのであれば、その施策によって「研究の実施体制及び支援・推進体制」をどのように整備するかが決まるのではないかと思われる。もしそうだとするならば、A-1-①の内容はA-1-②に含まれていると考えられるが、どのように整理されるのか。

(国立大学協会)

基本的な観点A-1-②「研究活動に関する施策が適切に定められ、実施されているか。」について、「研究活動に関する施策」が大学全体あるいは部局にあるとは限らないので、この様なプロジェクト指向の発想は、研究の多様性を阻害する可能性がある。プロジェクト指向の大学ももちろんあるだろうが、学問のための学問を追究する大学など多様な大学があり、大学の多様性を踏まえた柔軟な観点としていただきたい。

(国立大学協会)

研究成果を測る「基本的な観点」として、「研究出版物、研究発表、特許、その他の成果物の公表状況」が挙げられているが、小規模大学においてこうした資料をすべて挙げることは作業量の面から対応が困難であるため、一律に求めるべき資料としては「研究出版物」のみで十分であると考えられる。(国立大学協会)

選択的評価基準A-2「大学の目的に照らして、研究活動が適切に行われており、研究の成果があがっていること。」の基本的な観点には研究成果を示す外形的な指標が列記されているが、例えばA-2-②の「競争的研究資金の応募・獲得状況」は基礎的な研究をネガティブに評価する危険性があるなど、不適當な場合がある。もしこれらの指標が例示的なものであるなら、誤解の生じないように、その旨明確に記載すべきである。

(国立大学協会)

選択的評価基準A「研究活動の状況」(P. 27~P. 28)に関して、辞書編纂、フィールドワーク等、人文学的な長期的研究に配慮した評価の視点を盛り込んでいただきたい。

(国立大学協会)

A-2について、3つの観点は、比較的短期間で成果が現れる研究が評価の対象であるように見えるが、大学にとっては、短期間では成果が現れにくい基礎研究が重要であると考えられるが、基礎研究についてはどのような評価がされることになるのか。

(国立大学協会)

基本的観点としてあげられている事項は、いずれも部分的な指標に過ぎず、大学としてもこうしたデータを収集しているが、具体的な評価の方法が示されない限り、こうした観点を議論することは困難である。たとえば、A-2-②で競争的資金の応募・獲得状況等から「研究の質」を評価しているが、一面的であるため、このような要素だけでは不十分ではないか。こうした一般的な観点・基準ではなく、具体的にどのような方法と視点、指標で可能であるのか、ケーススタディを含めた詳細な説明を提示して欲しい。

(国立大学協会)

研究の「多様性」(基礎・応用、文科系・理科系など)を考えた場合、それぞれの研究の特性に応じた多様な観点によって評価が行われる必要がある。このような研究を評価する場合、「基本的な観点」では目的の達成状況等の分析に限界があること、研究によって有意性の乏しい指標もあるということを配慮の上、ご検討いただきたい。

(国立大学協会)

「基本的な観点」A-2-②の評価指標として「競争的研究資金の応募・獲得状況」が挙げられているが、最も一般的な競争的資金である科学研究費補助金を重視する意味で、「科学研究費補助金をはじめ競争的研究資金の応募・獲得状況」と記載を改めるのが望ましい。(公立大学協会)

A-2-①、A-2-③における、「地域との連携」や「関連組織・団体からの評価等」については、大学の総合的な評価方法の中で、大学の社会(産業、文化、経済など)への貢献度も重要な要素と考えます。社会からの評価方法については、客観的評価手法も必要かと考えます。(国立大学教育研究評価委員会委員)

【選択的評価基準B 正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況】

(趣旨)

趣旨の3行目「…体系的かつ継続的な学習の場として、…」について、正規課程以外の教育サービスにまで「体系的」を求めることには無理があるのではないかと。全国の大学の中には、例えば地域に根付いたコミュニティー・カレッジとしての機能を追求する大学も出てくると考えられ、このような大学では、体系的かつ継続的な学習の場の構築が図られることは十分にあり得るが、すべての大学に適切な観点とは言えない。

(国立大学協会)

「選択的評価基準B 正規課程の学生以外に対する教育サービス」の「趣旨」に係る解説の中で、教育サービスに関連する「重要なサービス」として、「講演会，シンポジウム，委員会等への参画」等を位置付けていれば，明示された目的に即した評価を行う旨記述されている。

ここで述べられている意図は，そうした目的が明示されていれば，「講演会，シンポジウム，委員会等への参画」の種類・内容についてそれほど立ち入った評価は行わないということなのか，それとも「基本的な観点 B-1-② 計画に基づいた活動が適切に実施されているか」に従い，種類・内容の適切性にまで踏み込んだ厳格な評価を行うことまで想定されているのか，いずれなのかがわかりづらいと思われる。

(国立大学協会)

(基本的な観点)

「活動」という言葉は，「正規課程の学生以外に対する教育サービス」を指すと理解してよいのか。

上記と理解するのであれば，「活動」という言葉が多いので，「教育サービス」など具体的に記載していただきたい。(国立大学協会)

基本的な観点B-1-③の冒頭「活動の結果及び成果として，活動への参加者が十分に確保されているか。」については，参加者数を指標としているが，例えば資格関係では少人数に対するケアが生じること，少人数参加者のための講演などが重要な社会貢献であることも考えられ，この指標が不適當な場合があるのではないか。

(国立大学協会)